

あとがき

考えてみると、私がこれまで書いていたりお話ししたりしてきたことのどこかに、いつも「クラス会議」があり、その必要性を強調してきました。私自身、小学校の教員時代には、本書で紹介したように、クラス会議を核に据えた学級経営に取り組み、その魅力を強く実感してきたからです。

これまでも、『先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級づくり』（二〇一〇年、七七〜一二二頁）、『教室に安心感をつくる 勇気づけの学級づくり2』（二〇一一年、一〇八〜一二〇頁）、いづれも、ほんの森出版刊）などをはじめとする何冊かの書籍や、雑誌などでも紹介してきました。

にもかかわらず、これまでクラス会議を前面に出した書籍を考えなかったのは、「クラス会議」のような実践は、少し「特殊である」とも認識していたからです。

普通に授業が成り立ち、普通に学校生活を送ることができているクラスにとつては、なにも時間をかけて、子どもの自治などつくらなくても、それなりに教育活動は進んでいきます。そこに意味を見出さない先生がいらっしやっても、何ら不思議はありません。クラス会議を知る前の自

分もそうでした。

しかし、クラス会議を提案して約一〇年。昨今は、研究授業で挑戦しようとする先生や、学校ぐるみでクラス会議に取り組む学校がずいぶん出てきました。学級崩壊や、そこに至らないまでも不具合を見せる学級集団の機能回復に役立つことが理解されてきたように思います。また、学級づくりに効果的ただけでなく、社会の中で人とつながりながら生きていく個を育てるために必要なことを教える場であることが認識されてきたとも思います。

実は昨日も、学校ぐるみでクラス会議に取り組んでいる学校の研究会に参加してきました。その学校では、すれ違う子どもたち全員が挨拶をしてくれました。みんなの課題、個人の課題をあたたかい雰囲気の中で話し合っていました。

この学校には、全校でクラス会議をベースにした全校会議のような意思決定機関があり、それが機能していることにも驚きました。

そうした動きの一つ一つに勇気をいただき、「クラス会議を中心に置いた本を書く」気持ちになつていきました。そんなときにいただいたほんの森出版の兼弘陽子さんのご依頼。「渡りに船」とはこのことでした。

本書を書くことができたのは、クラス会議を自分のオリジナル実践として展開してくださっている先生方、学校ぐるみで、あるいは研究会などを持ちながら取り組んでいらっしゃる先生方、さらには、クラス会議をその研究対象として、理論的にも実践的にも磨き上げてくれているわがチームの大学院生、学部生のみなさんのおかげです。ジェーン・ネルセン博士らをはじめとする

これまでのクラス会議研究における先達たちの功績は言うまでもありません。

みなさん、本当にありがとうございます。本書が、自分で考え行動する子どもの育成の一助となることを願ってやみません。

二〇一三年一〇月末日

赤坂 真二